



第107号

北海道ポーランド文化協会会誌「ポーレ」

2022.9.1

2022.10.30 (日) 豊平館で定例総会・懇親会を開催します！

本会は1987年10月に設立され、今年で35周年を迎えます。賑やかにお祝いしたいところですが、感染状況が見通せず盛大な宴会を催すわけには参りませんので、豊平館で和やかな懇親会を企画しました。ピアノ演奏をはじめ、楽しい企画を募集いたします。奮ってご参加・ご出演をお願いします。総会・懇親会のご出欠は、10月はじめに郵便・メール等でお伺いします。



中島公園内の
国指定重要文化財・豊平館

第36回 定例総会 ※本会会員向け

1F下の広間

15:30～ 総会 (1時間程度) ※入館チケットは当会が用意します。

16:30～17:00 食事 (希望者にはお弁当を用意します)

懇親会 ※どなたでもご参加いただけます。

2F 広間

17:00 開場 これ以降の入館は無料。※事前の入館・見学は¥300 自己負担

17:10 写真撮影

17:15 アトラクション

ただ今募集中！

19:30 終了

※夕食を済ませてお越しください。懇親会ではソフトドリンクのみをご用意します。フードのご用意や持ち込みは出来ません。



過去の演奏風景



ポーランド人によるコーラス

【入場無料】

定員先着50人 ※会員以外の方は↓氏名・連絡先をお知らせください
011-384-5984 (園部、Fax 共) ☒ hokkaidopolandca@gmail.com

※会場が休館となる場合は延期または中止します。

感染防止のため手指消毒・マスク着用をお願いします。

〈ポーランド・アイヌ『祖霊祭』シンヌラッパ・クンネニサツ〉プロジェクト

《第102回例会》

11.21 (月) 18:30～20:00

会場：札幌エルプラザ (北8西3) 4階大研修室

動画「アイヌとカムイのためのレクイエム」

～Requiem dla Ajnu i Kamui～鑑賞会

&お話し：丸山博(CEMiPoS 所長)

多原良子(メノコモシモシ代表)

入場無料 (詳細は10月はじめにお知らせします)

《第103回例会》

11.28 (月) 13:30～15:30

会場：かでの2・7 (北2西7) 520研修室

講演「アダム・ミツキエーヴィチ『祖霊祭』について」

講師：関口時正(東京外語大学名誉教授)

&公演『祖霊祭』 朗読：林家とんでん平

パフォーマンス：ポーランドアーティスト

アマレヤ劇団・メノコモシモシ(アイヌ女性会議)



日・ポ共同創造演劇
『DZIADY 祖霊祭』
2019-20より
©Maciej Zakrzewski

映画『赤い闇』の恐怖、わが身に迫った

山口 カ三



実在した英国人記者ガレス・ジョーンズ（ジェームズ・ノートン）の物語。命がけてソ連の穀倉地帯ウクライナ取材に入るシーン。童謡か民謡か不穏な歌詞が流れる。「隣の母さんはとうとう頭がおかしくなってしまった」。そして道端に放置された遺体の映像に被って「とうとう子どもを食べてしまった…」。

描写はむしろ抑制的だったが、正視できなかつた。400～700万人もが飢餓などで死亡したと言われる「ホロドモール」(人工飢饉)だ。穀物の全量を家族分も残さず供出させ、抵抗すれば逮捕処刑という恐怖政治。ナチスのホロコースト、ポルポトによる虐殺、ルワンダの悲劇などと並んで近代最大のジェノサイドと言われる。

6月1日、エルプラザのビデオ鑑賞会『赤い闇～スターリンの冷たい大地で』に参加した。市内上映を見逃していた作品。札幌映画サークルの仲間である池田光良さんが解説されると知って申し込んだ。ロシアによるウクライナ侵攻(2022.2.24)の2年前にポーランド・イギリス・ウクライナが合作しヴェネチア映画祭にも出品された。今日の独裁者プーチンと90年前のスターリンが二重写しに見えると、話題になっていた。

まだ近くにある過去

私も2.24に仰天した一人だ。アパート、商業施設への容赦ない砲撃に『アルジェの戦い』(1966)を思い出していた。フランスが植民地の抵抗運動を軍事力で押し伏せた映画だった。親友にそう書いてハガキを送ったら「オレは子どもだったが太平洋戦争末期、ロシア兵に襲われて親・姉妹と命からがら引き揚げた記憶がよみがえった」と初めて知らされた。そうだ、満州も朝鮮半島も「北方領土」も、海峡をはさむ隣国であり、時間もまだ色濃くつながっているのだ。

監視される記者クラブ

『赤い闇』は1933年、私が生まれる6年前の事件だ。世界恐慌のさなか、一党独裁で政治経済を押し進めるソ連だけが豊かに繁栄しているのはなぜか？ 欧米メディアも新時代のユートピアとか伝えているが本当なのか？ 疑いを抱いたジョーンズがモスクワに入る。直前まで英首相の外交顧問で、ヒトラーにインタビューしたこともある彼は、スターリンにも会いたいと考えていた。

待っていたのは秘密警察や密告者に監視された外国人記者クラブの実態だ。壁に耳あり障子に

眼あり。報道官の意に添わぬ記事を書いて送れば要注意人物とされ、取材も自由行動もできず自国に帰る他ない。本社もそれは望まない。監視と良心の呵責に堪えかね酒やアヘンに溺れる記者もいた。ジョーンズは慎重に仲間との距離を測りながら、友人の英国人男性記者と米紙の女性記者に近づく。そして穀倉地帯のウクライナで、まさかの飢饉が起きているらしいと聞き込んだ。

そこからはサスペンス映画さながら。友人記者は連絡が取れなくなり、「強盗に襲われて死んだ」とクラブで伝えられた。後で女性記者は「実際は暗殺されたのよ」と耳打ちする。

外国人記者クラブのヌシはピューリッツァー賞を受けた大物米記者だ。誰かが問題ある記事を書けば締め付けが来る、と自主規制の網を張り自ら監視役を務めているようにも見える。

アメリカ映画では『市民ケーン』(1941)ははじめ新聞・テレビ・ラジオなどをテーマにしたメディアものが大きな存在感を持つ。ケーンのモデル、新聞王ハーストは毀誉褒貶のある大経営者だが『赤い闇』の終り近く、ジョーンズの報告を聞き米紙に掲載指示をする場面がある。もっと後になると『大統領の陰謀』(1976)『ペリカン文書』(1994)『ペンタゴン・ペーパーズ』(2017)など。多くは真実の報道と言論の自由を高らかに称揚する内容だ。ヨーロッパにもかなりありそうだがいま思い浮かばない。日本映画ではわりと少なく、近年の『新聞記者』(2019)と『はりぼて』(2020、ドキュメンタリー)、日本が舞台の米作品『MINAMATA』(2020)は記憶に新しい。安倍疑惑を模した『新聞記者』では、情報を漏らした正義漢の公務員が自殺する。遺族が文書改ざんを命じた上司の責任を問う裁判は現実社会で今も続いている。

地方記者にも他人事ならず

かくいう私も50年前は記者の端くれだった。ジャーナリストと名乗るのは面映ゆい地方記者。空知のまちで炭鉱事故にピリピリしていた。外国への特派経験はなくピューリッツァー賞など憧れさえも持たなかったが、為政者と記者の関係は大小の差はあれど基本的によく似ている。どんな田舎でも、書か

れたくない部分はあり、できれば都合良い記事だけ流してもらいたいものなのだ。

私が退職した後に発覚した「道警裏金事件」。独自調査ですば抜いた道新はその後交通事故の取材にさえ意地悪されたそう。また別件で本社役員室に家宅捜索が入るとも聞いた。他社やテレビに大々的に報道させて道新はヤバイ会社だと信用失墜を狙ったのか。ソレツと他社が集まって派手なニュースになった記憶はないが。

対政治はもとより警察と報道のせめぎ合いはジャーナリズム史に数多い。小さな誘惑、重なれば泥沼のワナは日常的に警戒を怠れない。私の先生であり上司だった記者は一滴も飲めない人だったのに、飲み会に呼ばれたら断らず、ノシ紙に包んだ一升瓶を携えて行った。些細なことでも心理的に借りを作りたくないからだ、と言っていた。

エンドロールの衝撃

私は歴史が苦手だ。池田さん配布の中身濃い解説資料にあるドストエフスキーは1作も読んでないし科学史も初めて聞く話ばかりだった。この映画に登場するジョージ・オーウェルの『動物農場』の

雌鶏たちに関する部分は同事件をベースにしているそう。オーウェルがジョーンズに「真実を書け」と忠告するシーンは、池田さんによれば映画的創作らしいのだが。

知識乏しい私は、皇帝志向だの大ロシアだの、ナポレオンだナチスだと、多彩な解説・報道に戸惑うばかりだったが、あの地域の複雑な状況をおぼろげに理解し始めている。かつての軍国日本も引き合いに出される。返す言葉に窮するが、だからと言って「歴史の審判が下るまでは、どちらの味方もできない」と逃げていては、現代に身を置くものとして情けなさすぎる。殺戮を終わらせ、終末戦争は何としても避けなければならない、と考えるならジョーンズの勇気を見習わなければ…。彼と彼に続く真実の報道が無かったら、世界は長い間、赤い闇を遠くから透かし見るだけだったかもしれないのだ。

真のジャーナリズムが貫かれた、と感動した後で、胸に突き刺さったエンドロールについても書かねばなるまい。ソ連再入国を禁止されたジョーンズは、1935年8月12日、取材活動中を暴漢に襲われて死んだ。30歳の誕生日前日、日本統治下の満州であった。（やまぐち・りきぞう、元北海道新聞記者）



《第100回例会》ポーランド名画ビデオ鑑賞会を終えて

『赤い闇～スターリンの冷たい大地で』

札幌エルプラザ、2022年6月1日(水)【お話】池田光良(会員) =写真=



ロシアのウクライナ侵攻という衝撃的な事態を受けて、ウクライナとロシアの関係史をソ連時代に遡って考えてみたいというのが開催の動機でした。参加者は23名(うち会員12名)。

上映に先立って、映画歴66年で札幌映画サークルの会員でもある池田光良さんを講師に、作品の時代背景と近年のスターリンやウクライナをテーマにした映画について詳しく解説いただきました。30分という限られた時間でしたが、大変中身の濃いお話で、あらためてスターリン独裁政治の恐ろしさとウクライナが負った苦難の歴史について思いを巡らせるとともに、ウクライナ戦争の一日も早い停戦を願わざるをえませんでした。

参加者の感想

- ホロドモールについて知ることができたのでよかったです。この映画を見られてたいへんよかったです。
- ぜひ見たいと思っていましたが、想像以上！こんな凄い映画だったとは。ガレス・ジョーンズの名も知りませんでした。ジャーナリズムとは何か、深く考えさせられました。池田さんは知人で、博識は存じていましたが、広く資料にあたり検証される態度に感銘を受けました。オーウェルも読まなくちゃと思いました。

- 池田さんの資料がショックでもあり、また自分の不勉強さが身に染みました。ロシアは変わりませんね。戦争が一日も早く終わりますように。
- 映画は分かりやすく、よかった(暗くて重いけれど)。お話の資料は内容豊富で貴重。
- 見ごたえありました！不勉強な私にとって、ちょっと難しい内容でしたが、時代背景の資料は本当に助けになりました。感謝。もう一度みたい映画です。そして、今のウクライナの状況を改めて考えたい。
- ロシアの今の姿勢の底に流れる歴史、貧困、国民性などを感じ、ショックを受けました。今のウクライナに対するロシアの残酷さがここにつながるのか、とわかるような気がします。
- 池田さんのお話は、どこも参考になったが、特にルイセンコ学説についての説明が印象に残った。科学にイデオロギーをまとうことの危険性、「科学的社会主義」なるものの虚偽！

(園部真幸、運営委員)



札幌エルプラザ、2022年7月3日(日)

参加者数32名(うち会員22名)

[第1部] 詩劇『祖霊祭』

[第2部] 希求・日本

[第3部] 希求・ポーランド

ヤドヴィガ・ロドヴィッチ=チェホフスカ
元大使からのメッセージ



皆さんこんにちは！ 本日は、北海道ポーランド文化協会の皆様の「午後のポエジア」の会に際し、ご挨拶をさせていただくことを大変光栄に思います。

ご承知の通り、私は北海道を何回も訪れましたし、北海道ポーランド文化協会のゲストとして昔大変お世話になりましたので、懐かしいお顔が大勢いらしゃいます。

今日は私にとって特別な午後です。ポーランドの恋愛劇の最も重要な作品の一つ、アダム・ミツケヴィチの『Dziady 祖霊祭』の断片を読んでもいただきます。皆様がご自分の感性で、どう読み、どう理解されるのか、ドキドキしています。

ご存知かもしれませんが、今年、私たちはアダム・ミツケヴィチ・インスティテュートの資金援助により、特別なプロジェクトを準備しております。「ポーランド・アイヌ『祖霊祭』シンヌラッパ・クンネニサツ」と呼んでいます。最後の2つの言葉「シンヌラッパ・クンネニサツ」は、アイヌ語で「祖先の霊への祈り」と「夜明け」を意味します。今年11月に実現し、28日に最終発表を行う予定です。

ミツケヴィチは、ギリシャ悲劇のような西欧型の演劇ではなく、死者の魂を呼び鎮魂するには何が必要かを問い、民俗習慣・信仰・行事をベースにして、ポーランド独自の演劇を創り出そうとしたのです。彼は、古代ギリシャや後のイギリス・フランス・スペインの演劇のように、ヒーローが冒険し、戦い、愛し、舞台上で生きるタイプのドラマよりも、この伝統のほうがスラヴの感性にとって重要だと考えました。精霊と人間との交感のほうが重要であり、人の心を変えることができると考えたのです。

こういう考え方はポーランド文学の中のロマン派の特徴でもあります。古い唯一のスタイルではなく、フランス革命後、ヨーロッパ社会を動かした合理主義と物質主義、人間関係の破壊などを如何に乗り越えるかを考えて、新しい感性が生まれました。以上、ポーランドロマン派の独特な意味の簡単な説明をさせていただきました。

本日の朗読会の参加者、北海道ポーランド文化協会の皆様、ご来賓の皆様のご尽力により、このような会を開催することができまして、大変感謝しております。安藤先生には、連絡や調整をさせていただき、いつも会誌「POLE」を送っていただき、今日はこのメッセージを私の代わりに読んでいただいて、まことにありがとうございます。

どうぞ楽しい午後をお過ごしください。11月にお目にかかれまことを首を長くして待っております。

2022年7月3日

Jadwiga Rodowicz-Czechowska
スレユヴェクのユゼフ・ピウスツキ博物館



「午後のポエジア」2022/7/3



詩劇『祖霊祭』

(写真 安藤厚)

第101回例会に寄せて

ミツケヴィチ『祖霊祭』を読んで

栗原 成郎



ベラルーシ起源のポーランド人

アダム・ミツケヴィチ(1797~1855)はリトアニア大公国のノヴォグルデ(現在はベラルーシ領)の近郷ザオシェで生まれ、ベラルーシ起源のポーランド人であると言われている。彼の生まれ育った地域は元来リトアニア人の居住地であったが彼の時代にはすでにベラルーシ人の農村だった。リトアニア大公国はヨーロッパのなかでキリスト教受容が最も遅い国で、1387年に大公ヨガイラがポーランド王女ヤドヴィガとの結婚によりカトリックに改宗するまでは異教の国だった。

先祖の霊が一定の時に自分の家へ帰ってくるという民間信仰は多くの民族に共通に見られるが、ミツケヴィチは意図して『祖霊祭』に「ヴィルノ(ヴィリニウス)」の形容詞をつけている。この祖霊祭はバルト系の民間行事なのか、それともスラヴ系なのか?『祖霊祭』のテキストから見れば、スラヴ系と考えられる。

第二部の祭司(guślarz)は、原義はベラルーシ語で「グースリ gusli」と呼ばれる琴を弹奏してその楽の音(ね)と呪文により死者の霊を呼び出す呪術師・祓魔師(ふつまし)である。作中ではキリスト教(カトリック)と習合した異教の祭司である。

「《父と子と精霊》の名において W imię Ojca, Syna, Duchy」という祓魔の呪文はキリスト教の典礼の言葉を真似ているが、「霊 Duchy」には《聖なる Święty》という形容詞が欠けている。そのためこの「霊」は「夜の霊」でも「死霊」でも「悪霊」でもありうる。関口先生は苦心して「精霊」と訳された。

第四部に登場する、ギリシャ・カトリック(東方正教会の典礼を用いるカトリック教会)の正式な司祭(ksiądz)は、第二部のような「祖霊祭」を異教に端を発する迷信として廃止した人物であり「父と子と聖霊の名において W imię Ojca i Syna i Świętego Duchy」というキリスト教の典礼の言葉を用いている。

異教祭司は楽人にして歌人(うたびと)であり、男女の村人から成る合唱隊(コロス)の音頭取りでもある。祭司は「口寄せ」により死者の霊を呼び出す。

亡霊たち

最初に出現する亡霊は二人の稚(いとけな)い子

どもで、人生の苦難や試練を経験していないために天国へ行けないで、有翼天使として「楽園」(天国の一步手前)を飛び回っている。合唱隊は「只の一度も苦味を味わわざりし者は、天国で甘味を味わうことも叶わぬもの」と亡霊の格言を復唱する。

次の亡霊は恐ろしい姿の妖怪。生前は極悪非道の領主であったために、彼に虐待された農奴たちの怨霊が猛禽となって彼の肉を啄(つい)ばみ苦しめる。生前人間らしい行為をしなかった者は、「只の一度も人間であったことのない者は、人間によって助けられることもない」と非難される。

第三の亡霊は若い美しい羊飼いの娘ゾーシャ、誰の愛にも応えなかったために天国へ行けない。「只の一度も地面に足を着けざりし者は、決して天国に昇ることも叶わぬもの」と合唱隊はうたう。この娘の救済には愛が要求される。第一の霊は天使に、第二の亡霊たちは妖怪や猛禽に転生しているが、羊飼いの娘は妖異への転生ではなく幽霊として美しいままに現れる。人を愛することのできなかつた孤高の美女は生前においても幽霊のような存在だったのであろう。幽霊には脚が無いため「若者たちによって両手をしっかりとつかまれて地面に引き下ろしてもらわなければ、足が地に着かない」と言う。



追善供養の宴

ポーランド語の「Dziady 祖霊祭」に対応するのはベラルーシ語のDzjadyのみで他のスラヴ語に直接対応する言葉はない。ベラルーシ人は異教時代(6~9世紀)にバルト系のリトアニア人の居住地に進出して新開地の風土に順化し、バルト系人種と混血もした。ベラルーシ人の死生観によれば、春に自然が冬の眠りから目覚めて再生するとともに死者の霊魂も蘇って地下の世界から出てきて自分の家へ帰る。死者の霊たちは、生前自分たちが食べたり、飲んだりした食物、飲物を要求する。祖先崇拜のしるしとして人々は定期的に追善供養の宴を催し、死者の霊たちを招待する。

リトアニア地域では追善の宴の時に香を焚き招魂

の歌をうたう。饗応は年に数回、ふつう土曜日に催される。ベラルーシ西部では家の中に入ってくるのはその家で死んだ人に限られる、と考えられた。自然な死に方(病死、老衰死)をした人の霊は家の中に入ってきて饗宴に加わり家政を見守るが、自殺や他殺の人の亡霊は窓越しに家の中を覗くだけだという。このような死者追憶は、11月1日を「万聖節(全

聖人の日)」として教会で記念し、翌11月2日に「万霊節 Zadzuski」として墓地や家庭で帰天者を追悼するカトリックの年間行事とは異なる。

(くりはら・しげお、東京大学名誉教授)

挿絵 by Czesław Borys Jankowski,
from Adam Mickiewicz - Dziady część I, II i IV, 1896



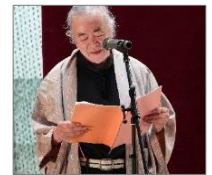
午後のポエジア～祖霊が導くその先には

人類がまさかの激しい揺り戻しを目の当たりにし、命と暮らしに甚大な被害を被り戦火逃れるウクライナ避難民の受け入れの先陣に立つポーランドの人々の、他人事には出来ない良心に注目が集まった冷たい春先、ミツケヴィチ作『祖霊祭』という題材を「午後のポエジア」に、という提案が届きました。

これは必然、お断りのしようもないリアルさで迫りました。祖霊という言葉の、民族的かつ人類共通の祈り、鎮魂の儀礼は、特に日本的な供養、お盆のお迎え・送りに直結し、如何に生きるかというフィロソフィーへの誘いでもありました。

しかし現実には、コロナ禍による活動の空白期間による企画意識の停滞や人材の幅の狭まりから、第一詩集200年記念のミツケヴィチの尊厳性・文学性に充分応えられるか、不安もありましたが、安藤会長の後押しもあって、企画がスタートしました。

困ったのは登場人物の多さです。本編にキャラクターが10以上、無言劇的なニュアンスの含みもあり…。そこで知人の札幌在住の林家とんでん平師匠(初代林家三平最後の弟子)=右写真=に懇願し、お一人で3役をこなして頂きました。当日のリハーサル、初顔合わせでスタンバイ。本番はさすがに見事に演じ分けて、その熱演は好評を博しました。



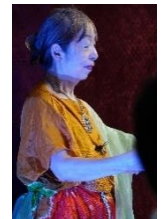
『祖霊祭』におけるミツケヴィチの命題は、準備の間も意識の線光から離れず、未だその幽玄の門からはるか奥の院を遠目で眺める程度ですが、本年は祖霊と現世の狭間を行きつ戻りつとなりましょう。

朗読会の第二部、第三部は「希求」をテーマに、それぞれの世界観に浸り堪能できたかと思います。

この度はコロナによる活動停滞後、また世代交代の過渡期となりまして、行き届かない面も多々ございましたが、今後さらに裾野を広げた「午後のポエジア」継承の一助となれば幸いです。

一刻も早く地上の争いが無くなり、人々の平安が戻る事を切に祈って。

(熊谷敬子、運営委員)(写真 尾形芳秀)



ウコラマッカラブ (お互いの魂に触れる)

祖霊とは、先祖の霊魂である。国や地域、信仰、慣習、儀礼形態によってかなり異なる。

北海道ポーランド文化協会主催の「午後のポエジア」、詩劇『祖霊祭』を鑑賞した。

元駐日大使のヤドヴィガ・ロドヴィッチさんに協力してポーランドの国民的詩人、アダム・ミツケヴィチ作を取り上げたものだという。小さな会場の舞台を上手く使い、演者の方々の熱意や想い、悲哀がとてもよく伝わってきた。

今秋、ヤドヴィガさんとアイヌ女性で「ポーランド・アイヌ『祖霊祭』シンヌラップ・クネニサツ(夜明け)」を開催予定である。アイヌの風習の祖霊は、シンヌラップ(先祖供養)といい、おいしい食べ物があると、火の側とか外の祭壇の前で先祖の名を言いながら、供物を置くものである。

お互いの祖霊や文化が融合した『祖霊祭』がどのようなものになるのか？ 演じて何を感じ、何を受け取れるのかと、今から魂が騒いでいる。

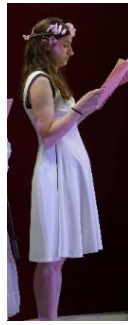
(多原良子、メノコモシモシ代表)

■本当にありがとうございました。「ポエジア」の写真を見て、衣装やポーズなど、みなさんがとてもよく準備されたことに感激しています！とても素敵です。YouTube で拝見するのが楽しみです。／(その後)YouTube 録画を見て、とても感動しました。たくさんのアイデア、人々の関わり方、シンプルで美しい形。詩とはこういうものなのだと思います。それに、ミツキェヴィチは、自分の詩が日常の人々の屋根の下に降りてきて、必ずしも大きな劇場で上演されるわけではなく、シンプルな人の輪の中で共有されることを夢見ていたのです。ありがとうございました！

(ヤドヴィガ・ロドヴィッチ=チェホフスカ)

■いつも最新情報を送っていただき本当にありがとうございます。ポーランドと日本がこんな風に協力し合えるなんて稀有なことです。

(ダヌタ・オニシュキェヴィチ Danuta Onyszkiewicz, ユゼフ・ピウスツキのひ孫)



■今回のポエジアは画期的だと思いました。ポーランド語と日本語のバランスが取れていました。

『祖霊祭』で、シルビアさん=左写真=が何か言うたびにラーラーと言って一回りしていました。中世ヨーロッパの吟遊詩人は町の城門でどのように詩を読み、ステップを踏んだのだらうと思います。出演者の皆さんの熱演で本物のヨーロッパを感じました。

第2部は、朗読の日本語の美しさと力を感じました。言葉は声に出してみてもこそ本物ですね。

第3部は、それと同じ意味でポーランド語を味わいました。ポーランド人の方々は毎年ポエジアに協力してくれますが、本当はあのようにしてポーランド語を楽しみたかったのだらうと思います。PC-スクリーンにより言葉の意味を理解することができました。このような日本語とポーランド語のコラボが本来のポエジアなんだらうと思いました。

ご出演の皆様、公演の成功おめでとうございます。

(小笠原正明、運営委員)

■タイトルの“Dziady ジャディ”には老人とか祖父の意味がある。古くポーランドの人々が信仰していたのは、古代スラブの神々であらう。しかし九世紀以前のスラブは文字を持っておらず、体系的なスラブ神話はフォークロアとして伝わるのみという。そうした土着の信仰をキリスト教が緩やかに取り込んでいった時代下の話である。



さて『祖霊祭』には4種類の霊が出てくる。罪の軽い、重い、中間の、そして終盤に出現する喪服の女に從う“亡霊”だ。文中に若い霊との言い方もあるから、死んで間もなく未練を背負ったままに迷っているなら、周囲を脅かす悪しき存在となるだらう。日本的に考えると、吊り上げし個性を失い先祖と融合するまで、一般的には50年を要し、それからやっと一族や子孫を保護する存在となるのだ。

このDziadyの儀式で霊をもてなす目的は、悪魔が生まれないようにするためだ。出産の世話人とされる故人の支持を得、その将来の平和のためにホストするということ。であるから何が必要かを聞き、彼らのために食べ物や飲み物を用意して歓待する。霊を怖がらせたりしないよう、騒がしくないなどという禁止事項も多く、火を灯すのはさまよいの道で迷子にならないようにするためとされる。この死霊が付き従おうとする喪服の女は、血族



の子孫かもしれないし、さまよう乞食といわれる“他の世界との交信者”かもはっきりしない。

ミツキェヴィチはこの作品を歌劇として考えていたという。ミサでの祈りは歌であり、歌は祈りである。キリスト教にせよ仏教にせよ、祖霊の住まう国に比べて天の国は遙かに遠いから、その天に向かって歌いあげようとしたのであらう。

村田は祭司役を仰せつかったが、荷が重い配役であった。なにせお相手は戦いの神であり、雷の神であるベルヌと思ってもいたものですから。



(村田譲、会員)

■特殊な今回の催しの前日はほとんど眠れず、不安一杯の本番でしたが、一人一人の実力・本領発揮。「火事場の〇〇力」出し合ってハーモニーをかなえました。調和!! 私自作詩・詩集と共に伝わったようでほっとしています。何人かの方とお話できお名刺(先川先生)を頂いたり、映画の講師をされた池田さんとも話したり、新しい出会いに感謝でいっぱいです。少しずつ心身の調子もどおり、協会行事にもゆっくり参加を考えています。今はやや満足感にひたっております。津曲先生(2019年死去)と小笠原先生のご縁もわかり、あのとき急にお名前を出したくなりましたことふしぎに思っております…。

(菅原三栄子、会員)



なぜ？ 11月に北海道で

「ポーランド・アイヌ『祖霊祭』シンヌラッパ・クンネニサツ」

ヤドヴィガ・ロドヴィッチ=チェホフスカ

それは、私たち人間が空間、記憶、言葉、視線、時間を共有しなければならないからです。アダム・ミツキェヴィチは並外れた直感を得て、地中海・西欧文明の原初的な長所に基づいて作られ宮殿や中庭や学校や大学の劇場で見慣れているものとは異なる、スラヴ演劇のモデルを作りました。彼がこれを書いたのは、リトアニアとポーランドがロシアの植民地にされていたときのことです。



その約100年後、W・B・イエイツが、独立と言語文化の回復のために戦うアイルランド人のために、日本能楽の影響を受けて『踊り手のための四つの戯曲』を創作したように、ミツキェヴィチは植民地主義者の課した課題に従い、英国とは異なる国民性を生み出す仕事を自らに課したのです。

死者の霊との交感

ミツキェヴィチの『祖霊祭 Dziady』は、ポーランド演劇の発展における金字塔です。ミツキェヴィチは何年もかけて『祖霊祭』を書き続けましたが、その上演を見ることはできませんでした。その源にある種子とは、素朴なスラヴ民衆の宗教儀式あるいは行事でした。村人たちが(カトリックと正教会の権威が禁じていたため)密かに集まり、穀物、牛乳、菓子、ウォッカを捧げる異教の儀式を行い、死者の霊を呼び出したのです。Dziadyという言葉には「祖父たち」という意味があります。地獄に行かず安らぎを得るにはどう生きればよいかという問いに、精霊が答えてくれると人々は信じているのです。精霊がやって来て答えてくれる。つまり、生きている人は死者と話し死者から学ぶことができるのです。ここからポーランド文学や社会におけるロマン的感性のエッセンスが発展しました。目に見えるものと見えないものが混交し、それにより人間は自己変革するべきなのです。そうして初めて、より良い人生を送ることができるのです。

詩劇『祖霊祭第二部』のテキストは非常にシンプルで、私たちはポーランド語原文の日本語訳の劇にアイヌ語のフレーズを加える試みも行っています。

ブロニスワフ・ピウスツキとの縁

私たちのプロジェクトの一つのきっかけは、120

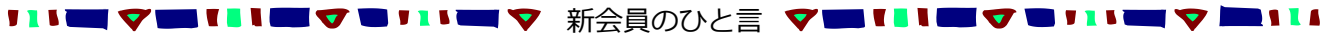
年前にブロニスワフ・ピウスツキが北海道(その前にサハリン)でアイヌの人々と出会い、彼らの言葉や習慣を記録したことです。彼は男女の声を録音しました。80年後先端技術のおかげで再生した昔の人々の声はまるで幽霊が話すように聞こえました。ブロニスワフは、生前は不連続きで、自殺しました。そのため、彼の霊を呼び出し、自殺の後に安らぎを得るには何が必要か尋ねることもできるでしょう。アイヌは彼に歌や時間や言葉を贈りました。時には食べ物やお金の贈り物と引き換えに。また、アイヌの人々は彼に子供や孫も授けました！アイヌの霊を呼び出しテキストと音楽を捧げて感謝するのには、正当な理由ではないでしょうか？

私たちは春から共同プロジェクトを立ち上げました。パートナーは CeMiPoS、さっぽろ自由学校「遊」、メノコモシモン、北海道ポーランド文化協会、ユゼフ・ピウスツキ博物館、アマレヤ劇団です。基本的な資金はアダム・ミツキェヴィチ・インスティテュートと「ミツキェヴィチ×44」プログラム、およびポーランド広報文化センターから提供されています。

北海道ポーランド文化協会のご尽力により、7月3日にとても興味深い詩の夕べが開催されました(第11回「午後のポエジア」)。春に行われたメノコモシモンとのオンラインミーティングを経て、札幌でのライブリハーサルと11月28日の最終発表会を計画しています。ポーランド文学・文化の大家である関口時正先生の講義「アダム・ミツキェヴィチ『祖霊祭』について」は、より良い準備となるでしょう。その前の11月21日には、メノコモシモンとアマレヤ劇団による動画「アイヌとカムイのためのレクイエム」の鑑賞会を行います。ぜひお越しください。

(Jadwiga Rodowicz-Czechowska, スレユヴェクのエッセイ、ユゼフ・ピウスツキ博物館副館長) [安藤厚訳]

- ◆日程◆ 《第102回例会》動画鑑賞会 2022.11.21(月)18:30～ 札幌エルプラザ(北8西3)4階大研修室
(入場無料) 《第103回例会》講演&公演『祖霊祭』 11.28(月)13:30～ かでる2・7(北2西7)520研修室



新会員のひと言



丸山 博

遅ればせながら会員にならせていただきます。ポーランドとの関わりは2017年私たちの国際会議にアマレヤ劇団が参加したことに始まります。それ以来今日まで、アマレヤの芸術監督カタジナ・パストウシヤク氏とは連日のようにメールをやり取りし、毎年メノコモシモシ(アイヌ女性会議)とアマレヤとの共同プロジェクトを実現してきました。その間、ポーランドには二度行きました。最初は2018年6月にアマレヤの拠点グダンスクに、二度目は同年10月にアマレヤの公演でクラクフに行きました。

今年はヤドヴィガ・ロドヴィッチ氏とアマレヤ、メノコモシモシの共同プロジェクト「ポーランド・アイヌ『祖霊祭』」に関わることになりました。

その矢先、アマレヤからは助成金を獲得できなかった旨連絡が入り、メノコモシモシとの共同プロジェクトの火を消さぬよう、学生時代からの友人先川君の力を借りて、募金活動をはじめるところです。今後ともポーランドと関わっていくつもりです。皆様、どうぞ宜しくお願い致します。

(まるやま・ひろし、CEMiPoS* 所長)



先川 信一郎

北海道ポーランド文化協会に加入しました。元北海道新聞の記者です。海外駐在が長く、米マサチューセッツ工科大学(MIT)に留学後、カイロ、ワシントン、北京支局長を歴任しました。退職後は、高知工科大学の国際交流センターの所長を7年間勤め、現在は札幌市立大学で非常勤講師をしています。得意分野はジャーナリズムと国際関係論。趣味は映画鑑賞と登山です。最近は韓国やウクライナの近現代史の映画とドラマにはまっています。よろしく願い致します。

ポーランドとの出会いは、学生時代に見たアンジェイ・ワイダ監督の映画「地下水道」でした。ナチス・ドイツに追い詰められたポーランド軍が地下水道から最後の抵抗をした映画です。遠い世界のことと思っていましたが、記者として真冬のワルシャワを訪れた際、石畳の下に地下水道があるのに衝撃を受けました。しかも、ドイツ軍に破壊尽くされた旧市街は、壁の色まで昔の設計図通り再現されていたのです。そこにポーランド人の不屈の意思を感じました。

2回目の訪問は、それから36年後の2019年5月になります。国民的ロマン派詩人の名を冠したアダム・ミツケビッチ大学は親日的で、高知工科大学との大学間交流協定をすぐにOKしてくれました。同大学は世界最先端の量子コンピューターの研究で知られています。第二次大戦中ナチス・ドイツが使っていた暗号機エニグマを解読したのは、ポーランド人数学者だったことをこの時知りました。

ご存じのように、ポーランドは、世界でも有数の親日国です。同国を代表する独立劇団の一つ「アマレヤ劇団」とアイヌ民族の女性たちの直接の交流は、コロナ禍で途絶えていましたが、アマレヤのメンバーが札幌を再訪し、アイヌの女性たちとともに祖霊や自然への崇拝といった独自のアートの世界を披露してくれることを心待ちにしています。

(さきかわ・しんいちろう、高知工科大学客員教授)

ポーランド&ニッポン歳時記 39

アイ・ラブ・ユー

この春、大学で働いていたときの教え子が訪ねてきました。今はもう彼女自身が大学で教えています。I love you と箱に書いてあるチョコを持って来てくれました。

na drugim piętrze
w łazience świerszcz skąd wziął się
w naszym mieszkaniu

三階の
アパートで鳴く
キリギリス

Monika Tsuda, Poznań ポズナン市、津田モニカ

świat za oknami
skwarem słońca drgający
choć zachód blisko

日の入りの
近くも燃える
世界かな

Piotr Wrzeciono, Warszawa ワルシャワ市、ピョートル・ヴジェチョノ

夏の月照してゐるやウクライナ
白靴しろぐつのリズムシンブル北の街
生ビール飲むも爺ぢぢいの心意気

岩見沢市、霜田千代磨(ホトトギス)

沢田和彦著『プロニスワフ・ピウスツキ伝』に「イースタンレビュー」賞！

2022年7月2日、ワルシャワ大学旧図書館において、第29回「イースタンレビュー」賞の授賞式が行われました。この賞は、1994年に歴史学季刊誌「イースタンレビュー」が創設した、東欧研究の分野で最も優れた書籍に贈られる権威ある賞で、毎年、歴史学、法律学、政治学、民族学の分野で多くの出版社や著者が応募しています。

審査委員長はヤン・マリツキ Jan Malicki 教授で、授賞式のホスト役を務めました。

多くの国の書籍が応募でき、これまでにポーランド、リトアニア、ベラルーシ、フランス、ロシア、アメリカから、そして今年も日本からも受賞者が出ました。

2021年には、ポーランドの歴史研究、外国語書籍、ドキュメンテーション、社会ジャーナリズムの各部門で、7つの賞が授与されました。今回初めて日本人の著作がエントリーされ、沢田和彦著『プロニスワフ・ピウスツキ伝～〈アイヌ王〉と呼ばれたポーランド人』(ポーランド語訳:バルバラ・スウォムカ Barbara Słomka)が受賞しました。その他の受賞者は、レシエク・ベドナルチュク(Leszek Bednarczuk、言語学者)、アダム・フレボヴィチ(Adam Hlebowicz、歴史学者・ジャーナリスト)、ズビグニェフ・オパツキ(Zbigniew Opacki、19-20世紀の歴史の専門家)、ダリウシュ・ヴェンジン(Dariusz Węgrzyn、現代史専門家)、ヴィオレッタ・ジェレツカ=ミコワイチク(Wioletta Zielecka-Mikołajczyk、ポーランド・ウクライナ・ベラルーシの東方カトリック教会の専門家)、ヨランタ・ジンドゥル(Jolanta Żyndul、ポーランド系ユダヤ人の歴史の専門家)の各氏です(アルファベット順、学術書名は省略)。

表彰式、受賞スピーチ、ディプロマ授与式は3時間に及び、非常に厳粛な雰囲気の中で行われました。埼玉の沢田和彦氏、ヴィルニウス政治学院のスタニスワフ・パウクシュタ Stanislaw Paukšta 氏など、インターネットを通じた参加者もいて、審査員や聴衆に生中継で挨拶しました。受賞した7冊のうち、3冊がヴィルニウス(ポーランド語: Wilno)でのポーランド人の文化生活に触れています。オパツキ氏の約800ページの本は、ヴィルニウスにあるステファン・バトリ大学人文学科の歴史で、ここから多くの優れた学者が輩出し、後にポズナン、トルン、ワルシャワで教鞭をとりました。同じ主人公の本が2冊、沢田教授の上記の本と、ヨランタ・ジンドゥル編『プロニスワフ・ピウスツキ日記1885-1887』があります。

沢田先生の著書への賛辞は、元駐日大使で、現在スレヴェクのユゼフ・ピウスツキ博物館のヤドヴィガ・ロドヴィッチ=チェホフスカが述べました。

マリツキ教授とロドヴィッチ博士の間で、将来、受賞者と「イースタンレビュー」誌、博物館の間で合意された時期にユゼフ・ピウスツキ博物館で沢田教授に直接ディプロマを贈呈することが合意されました。

(ヤドヴィガ・ロドヴィッチ=チェホフスカ) [安藤厚訳]



皆様今晚は、私は日本の国立埼玉大学名誉教授の沢田和彦です。

まず第一に、ワルシャワ大学東欧研究センター長、ヤン・マリツキ教授をはじめとするセンター員の皆様にご心よりお礼申し上げます。

本日は授賞式でスピーチさせていただくことをとてもうれしく、名誉に思います。

私は今から40年以上前の大学院時代にプロニスワフ・ピウスツキと巡り合いました。当時私はロシア文学を専攻しており、二葉亭四迷という人物に興味を持っていました。彼は日本の最初の優れたロシア文学者、翻訳家であり、有名な作家でもありました。そしてピウスツキが1906年に8カ月間日本に滞在した時、もっとも親しい友人として物心両面で彼に援助を与えたのが二葉亭

だったのです。

本日は、プロニスワフ・ピウスツキとはどのような人間だったのか、についてお話ししたいと思います。

強靱な精神

第一に、ピウスツキは強靱な精神の持ち主でした。彼はサンクト・ペテルブルグの学生時代にツアー暗殺未遂事件に加わった嫌疑で逮捕されましたが、その時作成された彼の調書で身体の特徴は次のとおりです。

「身長2アルシンあまり[約187センチ]…身体の特徴はくー やせぎすの顔[中略]四 胸の発達著しく脆弱で、肋骨と鎖骨が突き出ている。[中略]七 両腕と両足の筋肉の発達著しく脆弱である…」

このような肉体で10年にわたるサハリン島流刑、さらに3年間のサハリン島調査にピウスツキは耐え抜きました。その強靱な精神の素地となったのは、子供時代に母マリアから受けた家庭教育です。母は祖国愛に

貫かれ、ロシアのツァーリズムに対する敵意を生涯捨てませんでした。彼女は子供たちに幼い頃からポーランドの歴史と文学を教えました。後にプロニスワフの弟ユゼフはこう書き残しています。「母は私たちに自立した思考力を培い、個人尊厳の感覚の涵養に努めた。」

またロシア化されたヴィルノ第一男子古典中学校でプロニスワフが味わった数多くの艱難辛苦も、彼の強靱な精神を培った要素として挙げることができるでしょう。

子供好き

第二に、ピウスツキは子供への愛情、子供とすぐに仲良くなれる能力を備えていました。それゆえ彼はサハリンで流刑囚と官吏の子供たちの家庭教師をつとめ、先住民のギリヤーク(ニヴフ)や樺太アイヌの子供たちのために識字学校を創立させました。さらにこの能力は、ピウスツキの民族学調査において大いに威力を発揮することになります。初めて訪れた先住民の集落で、最初に子供たちが彼に近づいてきて、次にその母親たち、そして最後に父親たちが彼の元にやって来たのです。

仲介者の役割

第三の特徴は、敵対する者同士を仲介し、和解を模

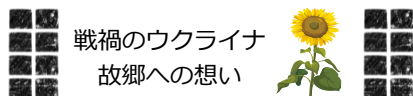
索し、統合を志向するという役回りを、ピウスツキが生涯担ったことです。この仲介者という役割は、例えばサハリンの流刑囚の間でありとあらゆる揉め事が起こった際に、彼が果たそうとしたものです。

また、第一次世界大戦開戦後のヨーロッパでポーランド人は、ロシア統治下のワルシャワを拠点とする民族主義志向の親露派、スイスのローザンヌに結集して保守主義を標榜するポーランド人亡命者らの親西欧派、弟ユゼフ・ピウスツキをリーダーとするポーランド社会党系の親オーストリア派が、それぞれの思惑で自分たちの国家や社会の再建を果たすべくしのぎを削っていました。その時にもプロニスワフは不得手な政治に手を染め、仲介者としての独自の政治的役割を果たそうとしましたが、これは成功しませんでした。そしてこの挫折が最終的に彼の命を奪い去りました。

プロニスワフ・ピウスツキは革命家にも政治家にも向いていなかったと思います。彼は時代の波に翻弄された、心優しき研究者でした。

終わりに、ヤドヴィガ・ロドヴィッチ=チェホフスカさん、バルバラ・スウォムカさん、ダヌタ・オニシュキェヴィチさんに心より感謝申し上げます。

ご清聴有難うございました。 (さわだ・かずひこ)



在外ウクライナ人の意識の流れ

ニーナ・ペトリシェヴァ



皆さん、自分の家族や友人のうち、何人が自分の出身地やその周辺に住んでいるのか、気にしたことはありますか？ その一人一人が今どこにいるのか、四六時中、常に意識していますか？ また、あなたは1日に何回ニュースを読みますか？ 日本には、あなたの街の最新情報を24時間放送してくれるメッセンジャーグループがありますか？

2月24日以前は、誰がどこに居るかなんて考えもしなかったのに…。ウクライナのニュースを読むのは2～3日に1回でした。ところが2月下旬のある恐ろしい、想像を絶する夜がすべてを変えたのです。もう5カ月も前から、私は数時間おきにハルキウのニュースを読んでいます。昼も夜も。そして家族や友人の居場所を正確に知るようになっています。

なぜなら、私の街はロシア連邦から40km のところであって、隣国の領土から巡航ミサイルが私の街に飛んでくるからです。1日に2～12発も。さまざまな時刻に、さまざまな地域へ。日中は、人々が働く地域へ。夜中は、人々が眠る地域へ。深夜0時とか、未明の3時とかに。ですから、みんないつシェルタ

ーに駆け込めばいいのかわかりません。

また、私の街は絶えず多連装ロケット砲で砲撃されています。ラッシュアワーにバス停が狙われるのです。そこで、砲撃の報道があるたびに、その時砲撃された地域にいる友人や知人がいつメッセージを送ってきたか、探すようになりました。砲撃のあと、メッセージがあればいいのですが、無ければ待つしかありません。だっていつもいつも「生きてるの？」なんてメールできませんし…。

でも、戦争は私に心配や恐れを教えただけでなく、感謝することも教えてくれました。今日誰も殺されなかったことを神に感謝。便りをくれた友人に感謝。私の母国へ効果的な支援をしてくれている近隣諸国や遠方の国々に感謝。特に、良き隣人であるポーランドと、この22年間で私の母国になった日本に感謝です。

でも、この支援と、それがウクライナ人にとってどんな意味を持つかについては、次回に書きたいと思います。もしご興味をお持ちいただけましたなら。

(Nina Petrishcheva、中京大学教授、ウクライナ・ハルキウ市出身)[安藤厚訳]

私にとってのポーランド

川染 雅嗣



1978年7月の初め、私はアンカレッジ、ハンブルグを経由してワルシャワ・オケンチェ空港に降り立った。空港には銃を持った兵士が至る所に立っており、安全な日本から来た私にはまさに未知の体験だった。一方で、同年ポーランド人ローマ法王ヤン・パヴェウⅡ世が誕生し、国中が喜びに沸き返っていた。

実は当時私はポーランドという国が東側の世界に属していることは知っていたが、その社会体制が日本とどのように異なるのか、正確には理解していなかった。共産主義、社会主義、資本主義、民主主義という言葉の定義も曖昧だった。ポーランド人の9割以上がカトリック教徒であることも知らなかった。いきなり結論を提示するようで申し訳ないが、2年4カ月に亘るポーランド滞在を経てからの人生は、まさにこれらのイデオロギーや宗教、そして芸術と人間本来の生き方の関係についての研究に費やされてきたといっても過言ではない。

音楽の話から始めよう。同年10月、私はワルシャワ音楽院(現ショパン音楽大学)研究科に入学した。同じ月に(ワルシャワの秋現代音楽祭)が開催され、連日連夜貪るように現代音楽を聴き続けた。この経験は今の大学教員としての仕事にも大いに資するところがあった。昨年度までピアノ演奏家コースの学生たち向けに(20世紀の音楽)と題する講座を年に2回受け持ち、自分が生きていく時代に作られる音楽を聴くことの重要性を訴え続けてきた。この信念はこの時に生まれたのだ。この音楽祭ではキャシー・バーベリアンの生の声を聴き、ペンデレツキと握手し、ルトスワフスキのチェロ・コンチェルトの世界に完全に魂を奪われた。ルチアーノ・ベリオのシンフォニエッタはまるで別世界の音楽に聴こえた。

ワルシャワ音楽院での師匠はカジミエシュ・ギェルジョド教授だった。当時相愛大学の客員教授でもあり、日本にも度々来られていた。先生には自由にさせて頂いたと思う。好きなように音楽を解釈し、好きなように演奏していた私の拙く底の浅い演奏もまずは褒めて下さった。ただその後が手強かった。「Bardzo dobrze 大変良い」と2回ほど繰り返したあと「Alleしかし」で始まる指導がなかなかのものだった。ただ、日本でのレッスン体験と異なり、まずは生徒の拙い演奏も受け入れた上で、伝統的な音楽表現法を諄々と説く様は新鮮で、その姿勢は今の自分にも確実に受け継がれていると思う。現在の私の指導法の基礎はワルシャワ時代に築かれたのである。

先生のクラスにはユニークな学生が多くいた。ある学生はいつも先生と演奏法やテクニックについて延々と議論を繰り返していた。ポーランド語がまだあまりよくわからない私でも、先生と彼の間で妥協点を見いだすのは難しそうに思えた。彼が帰った後先生はホッとした表情で「ホッホッホ、彼は哲学者だからね」と言って笑った。こんな光景は日本では見たことがなかった。

1979年だったか、私はオシフィエンチム(アウシュビッツ)を訪れた。ナチスの負の遺産だ。正視出来ない記録映像を観た後、一通り施設を見学して歩くうちに気分が悪くなってきた。収容所の入り口に掲げられた(ARBEIT MACHT FREI 労働で自由を)という悪魔のささやきのような言葉も欺瞞的だった。ガス室や焼却炉も目の当たりにした。ホロコーストは歴史上の事実として知ってはいたが、現場に足を踏み入れてみるとその現実感は一瞬のものではない。

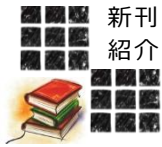
偶然、私は大学4年の時NHKで放映された(QB7)という連続テレビドラマを観ていた。原作者は米国のユダヤ系作家、レオン・ユリス。彼は『栄光への脱出』の原作者で『OK牧場の決闘』の脚本家としても知られている。アンソニー・ホプキンスという俳優もこのドラマで知った。一種の法廷劇で、ホロコーストをテーマにしたあるユダヤ人作家の作品で、強制収容所で人体実験を行ったと告発されたポーランド人医師の名誉回復の物語である。このドラマとオシフィエンチム訪問によって、私はユダヤ人問題により強い関心を持つことになったのである。

そのうち1980年になり、ヴァウエンサ(ワレサ)議長率いる「連帯」の運動が始まった。その年に予定されていた第10回ショパン国際ピアノコンクールの開催が危ぶまれ、ハンガリー動乱やプラハの春のことが頭をよぎったが、コンクールは無事開催され、北ベトナム出身のダン・タイ・ソンが優勝した。

それから42年経って、今度はロシアのウクライナ侵攻である。一体世界はどうなっているのだろうか。世界の首脳たちは異口同音に平和を唱えるが、一向にこの世界から紛争や戦争、飢餓はなくなる。SDGsだって欺瞞に思えてくるのは私だけだろうか。

このような混乱した世界で音楽を追求する意味はどこにあるのか。その探求は冒頭の結論じみた言葉と相まって、今でも私の中で続いているのである。

(かわそめ・まさし、昭和音楽大学特任教授、会員)

新刊
紹介

『日本・ポーランド関係史Ⅱ：1945～2019』

エヴァ・パワシュルトコフスカ（著）白石和子（訳）彩流社 2021.12

本書の前編にあたる『日本・ポーランド関係史 1904～1945』（エヴァ・パワシュルトコフスカ；アンジェイ・タデウシュ・ロメル著、柴理子訳、彩流社、増補改訂版 2019、初版 2009）では、123年ぶりに復興した民族国家の世界からの承認を求めるポーランドと、新興大国としてヨーロッパで確立した地位を築きたい日本が関係を深めていく過程が分析され、政治関係を中心にとりわけ軍事・諜報分野できわめて緊密な関係が形成され、第二次大戦中も維持されていたことが明らかにされた。

前著は、両国のオリジナル資料によって多くの事実が明確にされるとともに、それまで歴史のはざまの個人的エピソードとして知られていたことが、改めて両国の国家間関係の中で歴史的に位置づけられたとして高く評価された。

その続編として書かれた本書は、第二次大戦終結後から現在までの両国関係を分析し、大きく4つの部分からなる。第一部は本書の大部分をなす年代別の政治と外交、第二部は両国の相手国文化と言語の研究、第三部は両国におけるそれぞれの文化普及・交流史、第四部はそれぞれに在住する個人と組織を取り上げている。限られた紙幅の中で、丹念な資料調査と多くのヒアリングを基礎とした600頁を超えるこの大著を詳しく紹介することはどうも無理なので、評者が本書を読んで感じたことを中心に書いてみたい。

政治・外交面での両国関係

第一部の時代背景は、主にポーランドの側の激変した政治状況、すなわちソ連の圧力下の社会主義圏への組み入れ、国内の変革運動と戒厳令、社会主義からの体制転換であり、日本の側のアメリカの影響下に限られた防衛力のみをもつ平和国家への国家進路の変更であった。結果的に冷戦体制下で東西両陣営にそれぞれ所属することになった日本・ポーランド両国は、政治的・軍事的に特段に関係を深めることはなく、特に日本政府の、懸案事項も利害関係も少ないポーランドとは政治的に距離を置いた外交姿勢が印象に残った。

唯一といえる例外は、おそらく、国内的には東南アジア・インド重視の外交政策と受け取られている2006年の麻生外相による「自由と繁栄の弧」外交の提言が、冷戦後にユーラシア大陸周辺部に成長する民主主義国家としてのポーランドをバルト海に至る「弧」の最後のパーツとして重視していたという指摘である。この外交戦略を地政学的な発想として見直すのは興味深いものがある。

前著の中で日本・ポーランド関係を律していた最大の要素は、共通の隣国、ロシアとの関係であ

った。その両国の地政学上の共通項は戦後の歴史の中でいつしか忘れられてきたが、2022年2月24日のロシアによるウクライナ侵攻によって再び激しく思い起こされることになった。日本とポーランドの政治的・外交的関係は、今後大きく変わる可能性もあることを、図らずも旧著とともに本書が示していると感じた。



学術・文化面での両国関係

第二～四部は、外交史を超えた、本書の大きな特色を示す部分で、広く学術・文化面に目が配られ、私人や民間の組織の活動までが紹介されている。本書の中にきわめて多くの知己の名前を発見して驚くのは評者ばかりではあるまい。それは単に懐かしい個人的な感慨を呼び起こす以上に、個人と個人のつながりが両国の相互理解と相互関係の基礎であることを改めて思い返させた。どの国との関係でも同じであろうが、とりわけ日本とポーランドとの関係では、個人的なつながりの感覚がより大きな両国間の関係に結実するケースが多いように感じられた。

昨今ますます多くの日本人がポーランドに関心を持ち、同国を訪れているとの実感を持っていたが、本書が個人や民間組織の活動に光を当て、また第一部でも政府レベルでの政治外交だけでなく、大使館レベルでの個人と組織の活動が資料によって丁寧に分析されたおかげで、そうした変化の背景を確認することができた。

個人的には評者の当時の所属を関西学院大学と訂正したいが、同大学が思った以上にポーランドと縁が深い事実を本書によって知ることができた。

事実を丹念に調査し、幅広い関係者にも直接ヒアリングを行った著者の努力にはただ感嘆するほかない。本書の成果を高く評価するとともに、その成果が、本書での研究対象外とされている両国の経済関係についてのしかるべき専門家による将来の詳細な分析にもつながることを期待したい。

（藤井和夫、日本ポーランド協会関西センター代表）

『地球の平和』

スタニスワフ・レム (著) 芝田文乃 (訳) 国書刊行会 2021.12

レムの最後から2番目のSF長編にして、泰平ヨンシリーズの掉尾を飾る作品がついに翻訳された。軍縮のために地球上の全ての兵器が月に移された。しかし、月では兵器が自動進化を遂げているらしい。その様子を確認すべく主人公は極秘に偵察に送りこまれる。ただし、普通の小説と異なるのは、泰平ヨンが月面で脳梁切断されてしまい、右脳と左脳が別々に判断するので、左半身が左脳に反抗するというスラップスティックな状況に置かれている点である。なんとややこしい。

機械の自動進化というモチーフは先に新訳された『インヴィンシブル』にも通じる。しかし、ユーモアには乏しい『インヴィンシブル』などの初期の本格的SFとは異なり、本作は諧謔やアクション、スリルに富んだドタバタ的な展開が目立つ。同時代にソ連で活躍したストルガツキイ兄弟も、初期の銜のないリアリズム的な作品から、中後期は風刺やユーモアに富んだ作風へと変遷した。

真の目的が明かされないまま、半ば巻き込まれるようにして主人公が任務に就くことを強いられ、最後に壮大などんでん返し待ち受けという展開も、ストルガツキイ兄弟の後期の作品とよく似ている。思いもかけず分裂した自己という題材についても、人間が意のままになしうることがいっただけだけあるだろうかと思えば、付き合っていくかざるをえないものだ。本書の根底には人間のそうした現状をおおらかに肯定する態度があると思われる。

パンデミックと戦争

レムは全く予期していなかったことだが、軍縮というテーマと、パンデミックに似た最後の破局的な災厄について、2022年に生きる私たちは敏感に受け止めざるをえない。レムの故郷、リヴィウも爆撃を受けた。キーウの爆撃された現場について「写真を見るかぎり、エアコンの室外機やカーテンが見受けられず、このアパートは無人である。ロシア軍は民間人を攻撃していない」と私の知人のロシア人は

主張する。社会学の知見によれば、うわさやデマの本当の問題は情報の真偽ではなく、実は情報の解釈の次元にあるそうだ。泰平ヨンの友人タレントガ教授の「人は自分が信じたいことを信じる」という指摘は、全くその通りである。

小説の最後に唐突に明かされる破局について読者の受け止めはさまざまだろう。私たちの現実はどうか。2021年5月、新型コロナウイルスの感染が下火になるや否やイスラエルはガザ地区を空爆し、今年、パンデミックのさなかにもロシアはウクライナへの侵攻を始めた。ロシア外相ラヴロフは何の根拠もなく「ヒトラーにユダヤ人の血」と放言し、イスラエルのロシア系ユダヤ人は憤激した。かたやパレスチナのハマスは、同地では平和の調停者として振舞うロシアとの関係を保ち、今年5月にはモスクワを訪問した。

世界の現実複雑である。それにしても、パンデミックと戦争とどちらがマシなのか。この世界では、少なくともパンデミックは戦争を止められるほどの大破局ではないことが明らかになった。小説の最後の文章の通り、私たちはこれからも生き続けなければならない。では、われわれ人類の文明は生きるに値するほどの水準に達しているのだろうか。それは戦争を廃絶できるか否かにかかっているのだろう。

(宮風耕治、ロシアSF翻訳家)



『ミコワイ・レイ氏の鏡と動物園』

関口時正 (編/訳/著) 〈ポーランド文学古典叢書9〉未知谷 2021.11

本書は、著者の言葉を借りれば、ミコワイ・レイ (1505~69) についての「エッセイに加えて、レイのテキストをつまみ食いしながら、日本語に訳し、紹介した本」で、そのテキストの「選択もきわめて偏ったもの」(「あとがき」) になっているが、この〈偏ったつまみ食い〉が本書を「優れた研究書」(POLE106号12頁) にも、出色の〈作品〉にもしている。

全六章のうち第三~六章までは、それぞれ異なるレイの代表作を年代順に扱い、そこから章題を採っている。第三章『像』(1558)と第四章『動物園』(1562)は、どちらも長い原題を略称した〈青年が

古代の賢人たちと出会っていく物語〉と〈教訓的・風刺的なエピグラム集〉だ。第五章「フィグリキ、すなわち笑い話」は『動物園』の付録で、独自のタイトルページを備える小咄集だ。そして第六章「鏡に



映す『真面目な人間の一生』では、『鏡』(1568)と略称される大著の半分以上を占める『真面目な人間の一生』が〈ポーランド士族の理想像〉を描く。

これら四章では、レイの作品の断片の翻訳の前後を著者の解説と補足が、欄外の註ではなく地の文として続く。著者によると、レイは「実学的、実践的」知識に裏打ちされたポーランド語で「圧倒的な数の名詞」を並べ「リアリティをもって」「書く行為そのものを、ポーランド語自体を楽しんでいる」。そしてそこに活写される実際の「農事、家事を《楽しめ》《味わえ》」と興味深い人生観を説く。

そして第二章「ミコワイ・レイという人」では、作品からは知り得ないレイの性格や実生活が鮮やかに描き出される。例えば、その奔放さと鼻っ柱の強さから学校制度に収まり切らなかったレイ、だがいざ必要と見るやラテン語でも古典の素養でもさっさと身に着けてしまうレイ、凄まじい数の訴訟沙汰を物ともせず所有地を増やしていった遣り手の荘園領主レイ…。この章では、レイの親友アンジェイ・チェチェスキによる伝記(『鏡』の跋文)が抄訳されている。

第一章「言語と民族」こそ出色の「エッセイ」だ。著者はレイ自身の序文や後記等を引用しながら、「ポーランド文学の父」が高い〈民族的自意識〉と

〈国語意識〉を持っていたからこそポーランド語による文学を広めようと作品を書いたのだと論じる。ポーランド語が単なる〈ポーランドという土地で話されている言語〉ではなく、〈ポーランド人〉の〈国語〉として明確な民族意識と結びつく瞬間は、著者でなくても興味をそそられる。そしてその瞬間を、ポーランド国家の〈黄金の世紀〉にポーランド語でのみ作品を発表したレイに見出すのは、とても自然だろう。

生活や労働を楽しめ

本書表題の「鏡」と「動物園」は「ミコワイ・レイ」の代表作を指すが、では「氏」はどこから来たのか？ 添えられたポーランド語表題にも『...pana Mikołaja Reja』とある。著者は「あとがき」で『真面目な人間の一生』の男が「“殿”ではなく“氏”の顔を見せるのを垣間見た気がした」と説明する。もちろん、領主として依然「あれこれ指図する殿様」に変わりはないが、「生活や散策や労働を“楽しめ”と語る姿勢に近代的な個人が見えるような気がした」という。そして日本語の「氏」でもポーランド語の「pan」でも、敬称として人名に付くと、話者と相手との関係が無色透明ではなくなり、関口時正氏と「ミコワイ・レイ氏」との関係が具体的に浮かび上がる。著者はきつとレイや彼のテキストとの対話を、さらにそれを書き留める作業を、レイのように〈楽しんで〉いるのだろう。

(津田晃岐、聖ヨゼフ・カラサンス学園高等学校教員)

『第三共和国の誕生：ポーランド体制転換 一九八九年』

田口雅弘 (解説/訳) 〈ポーランド史叢書7〉群像社 2021.12

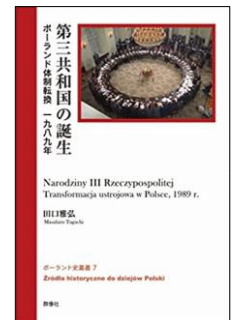
本書は1989年のポーランドにおける円卓会議に至るまでのプロセス、およびその後の状況について、主要な資料の翻訳とそれらに関する解説により、当時の状況を明確にすることを試みたものである。現在では当然のように考えられているいわゆる「体制転換」のプロセスについて、実はここにいたるまでにはさまざまな障害が存在していたこと、およびその障害を克服するには「僥倖」が存在していたことを明らかにする書籍である。

本書は、著者によるポーランドの体制転換の前後の状況に関する解説(第一章)と、当時の資料となる円卓会議合意書(第二章)、マゾヴィエツキ首相の国会演説(第三章)、およびバルツェロヴィチ・プランの概要(第四章)に関する翻訳の四章からなる。第二章以降の資料の翻訳に関しては、これらの資料がおそらく初めて日本語に翻訳されたという意味で、今後ポーランドの体制転換に関する歴史

ないし政治史研究者が(翻訳の不備などを指摘する可能性はあるが)参照すべき史料となることは間違いない。

第一章の解説に関しても、基本的には体制転換期のポーランドの状況に関してコンパクトな説明を行っているという点で、よくまとめられているといえる。円卓会議が通常の制度の枠外で実施されたこと、バルツェロヴィチ・プランが当初はポーランド経済にマイナスの影響を与えたことなどは、今の時点から振り返れば大きな問題ではなかった、という判断がなされるであろうが、当時このようなことが問題として取り上げられていた、という事実については、認識しておく必要がある。なぜ1989年に体制転換が生じたのか、ということについても一度考えてみたい方にとっては、必読の一冊となるであろう。

(仙石学、北大スラブ・ユーラシア研究センター教授)





プロニスワフ・ピウスツキ104年忌(2022.5.17、ウポポイ記念碑前)命日にあたり、古式舞踊披露&記念撮影が行われ=上写真左から=野本正博文化振興部長(写真提供)、安藤厚会長と井上紘一会員、佐々木史郎博物館長らが参加しました。



♪ポーランド・フェスティバル(2022.6.18、渋谷ストリームホール)=左写真左から=東京事務所の霜田英麿所長が、広報文化センターのU.Osmycka所長、シロンスク合唱舞踊団のZ.Cierniak団長、美しい衣装を纏った団員のみなさん=右写真=と交歓しました。(安藤厚)

会員動向 (2022.5~9)

入会:丸山博、先川信一郎、中島幸治 (敬称略)
退会:神稚子、古内久大

ご寄付 (2022.6~8) 感謝申し上げます

(1口千円)(7)長屋のり子(3)土屋和子

新年度 (2022.9~2023.8) 会費納入のお願い

年会費(一般3,000円、学生1,500円)また、維持会費としてご寄付(1口千円)も承ります。

【ゆうちょ銀行振替口座】記号02740 5 番号19735 【加入者名】北海道ポーランド文化協会 (または)
[北洋銀行(本店営業部)普通預金口座][店番号]028[口座番号]0605084
[加入者名]ホッカイドポーランドブンカキョウカイ(北海道ポーランド文化協会 会長 安藤厚)
※ご請求額は個別の納入依頼(振替用紙同封)をご覧ください。
※遠方の方はご寄付 年千円で会誌 POLE の定期読者になっていただくこともできます。事務局にお問合せください。

POLE107 目次

創立35周年《第36回定例総会・懇親会》／〈ポーランド・アイヌ『祖霊祭』シンヌラップ・クンネニサツ〉プロジェクト《第102回例会》動画「アイヌとカムイのためのレクイエム」鑑賞会《第103回例会》講演「アダム・ミツキューヴィチ『祖霊祭』について」関口時正&公演『祖霊祭』…………… 1

《第100回例会》報告:映画『赤い闇』の恐怖、わが身に迫った／ビデオ鑑賞会を終えて(山ロカ三、園部真幸)…………… 2

《第101回例会》報告:メッセージ(J・ロドヴィッチ)／ミツキューヴィチ『祖霊祭』を読んで(栗原成郎)／午後のポエジア～祖霊が導くその先には(熊谷敬子)／ウコラマッカラブ(お互いの魂に触れる)(多原良子)／感想(J・ロドヴィッチ、D・オニシュキューヴィチ、小笠原正明、村田謙、菅原三栄子)…………… 4

なぜ? 11月に北海道で「ポーランド・アイヌ『祖霊祭』シンヌラップ・クンネニサツ」(J・ロドヴィッチ)…………… 8

《新会員のひと言》(丸山博、先川信一郎)…………… 9

《ポーランド&ニッポン歳時記》39(津田モニカ、ピョトル・ヴジェチョノ、霜田千代麿)…………… 9

沢田和彦著『プロニスワフ・ピウスツキ伝』に「イースタンレビュー」賞!(J・ロドヴィッチ、沢田和彦)…………… 10

在外ウクライナ人の意識の流れ(N・ペトリシェヴァ)…………… 11

私にとってのポーランド(川染雅嗣)…………… 12

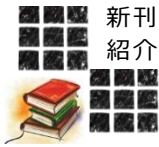
《新刊紹介》『日本・ポーランド関係史 II:1945~2019』(藤井和夫)／『地球の平和』(宮風耕治)／『ミコワイ・レイ氏の鏡と動物園』(津田晃岐)／『第三共和国の誕生:ポーランド体制転換 一九八九年』(仙石学)…………… 13

B・ピウスツキ104年忌／シロンスク合唱舞踊団と交歓(安藤厚)…………… 16

《新刊紹介》『ウクライナ青年兵士との対話』(長屋のり子)…………… (別紙) 17

詩・この町に生まれ(小篠真琴)…………… (別紙) 18

 <p>発行 北海道ポーランド文化協会 〒060-0018 札幌市中央区北 18 条西 15 丁目 3-19 安藤方 TEL・FAX 011-556-8834、hokkaidopolandca@gmail.com</p>	<p>ポーレ編集委員会</p> <p>安藤厚／新井藤子 氏間多伊子／熊谷敬子 塚本智宏／松山敏</p>
<p>東京事務所 〒107-0052 東京都港区赤坂 9-6-29-309 音響計画(株) 霜田気付 TEL 03-6804-1058 FAX 03-6804-6058</p>	



『ウクライナ青年兵士との対話』

土橋芳美（著）私家版 2022.7

〈出版の経緯〉

芳美さんから五月十五日、午前、緊張した声で電話があった。

「今朝、滝の音のような激しい泣き声で目が覚めたの。金髪の美しい青年が私のベッドの脇で肩を揺らして蒼白な貌で泣いていた。どうしたの、あなたは誰？ と聞くと、苦痛に満ちた表情で嗚咽しながら『ウクライナの兵士です。今、僕はロシア兵に狙撃され銃弾が内蔵を貫通、あまりの痛さに大きな樹に寄りかかってドクドク血を流している僕の肉体を置いてこうして魂だけ夜空を翔んで気付くと此処に来ていたのです』と言うの」。そのあと青年とのまざまざとした対話が、ざっと告げられた。私は驚愕しながらそれを聴いた。それは夢幻(ゆめまぼろし)といった曖昧なものではなく、彼女にいつも粛々、リアル克明な映像としてやってくる。

芳美さんが祖先の怒り訴求に促されて初めて書いた叙事詩『痛みのペンリウク』*は、北海道新聞文学賞を直ちに受賞、それは仏語翻訳すらされて世界に飛び翔とうと今している。小説集『揺らぐ大地』*も商業出版されて、話題騒然。時の人めいているが、芳美さんにその傲り、微塵もない。今、次の執筆のために瀟洒な札幌での生活をサラリ捨て、ジョン・バチェラーを書く為の祈りの生活、聖書研究に山形に転居して只管(ひたすら)、勤しんでいる。清雅極まりない。本の出版にあたり安藤厚氏のご教示を多々戴いた。著者、編集者の感謝、限りない。

(編集:長屋のり子、本会会員)

A5判 58ページ、定価(600円+税)+郵送料

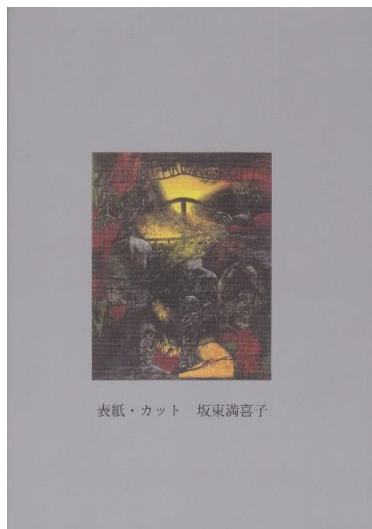
(好評発売中!) 購入申込み先: サッポロ堂書店 TEL/FAX 011-522-8024

https://www.kosho.or.jp/products/detail.php?product_id=430632588

※『痛みのペンリウク～囚われのアイヌ人骨』土橋芳美著、草風館 2017.3【北海道新聞文学賞詩部門佳作(第51回)】わしらは祈りの民だ 朝に 夕に カムイ(神)に祈って暮らしてきたー。アイヌ史上の過去から現在にいたる深刻な出来事を語り伝えた長編叙事詩。ペンリウクの遺骨について綴った文章も収録。 https://honto.jp/netstore/pd-book_28387143.html

※『揺らぐ大地』土橋芳美著、藤田印刷エクセレントブックス(JRC 発売 FAX:03-3294-2177 / TEL:03-5283-2230) 2022.8

<https://www.jrc-book.com/list/fujita.html>



この町に生まれ

日いづる国の波打ち際で
桜が咲く日を待ちのぞむ

波の飛沫が日をつつみ込めば

私はひとりで町の境に

立ち尽くしたまま

閉じた目に赤い十字の絆をつくる

赤い十字の絆の下で

波打つ港は敦賀かと思ひ

桜の咲く国へと導かれたのなら

命のビザを今、手に入れんと知る

境界線にはフォルケフオイスコーレ

かつてせたなの盟友たちと

杯を交わしシベリアの地の極寒を想ひ

函館の山のハリストスを聴く

小篠 真琴

三本杉まで打ち寄せる波は

アレウト号からの号砲なのでは？

慰霊の聲だけ鳴り響くだろう

円空仏から切り取る能面

目を閉じもう一度、赤い十字を

ウクライナまでは届かぬだろうか

日いづる国の旗はゆれると

下からだ半分のみ熱波に染める

攻め入ることはなきにしもあらん

今金の地の境に立ち尽くし

私の魂を授けるべきは

未来永劫、祈りつづける

波に浮かべた桜の舟だ

(こしの・まこと、詩人、瀬棚郡今金町在住)

※詩友から、隣町せたなでフォルケフオイスコーレに取り組

む知人の地縁を教わり、その境界から詩想を得る。



POLE no.107 (September 2022)

Newsletter of the Hokkaido-Poland Cultural Association

Table of Contents

Announcement: 36 th Annual Meeting and Reception (35 th Anniversary of the Foundation) on 30/10/2022 & Project "Polish Ainu 'Forefathers' Eve' - Sinnurappa-Kunne Nisat" (1) Video Screening of "Requiem for Ainu and Kamuy" on 21/11/2022 (2) Lecture "Adam Mickiewicz's 'Dziady'" by T. Sekiguchi & Performances "Forefathers' Eve" on 28/11/2022	1
The Horror of the Polish Film "Mr. Jones", which I was faced with (R. Yamaguchi); Report of the Video Screening of "Mr. Jones" on 01/06/2022 (M. Sonobe)	2
Report: 11 th Reading Session "Afternoon Poesia" on 03/07/2022 - J. Rodowicz's Message; Reading Adam Mickiewicz's "Dziady" (S. Kurihara); Afternoon Poesia: beyond which "Forefathers' Eve" lead (K. Kumagai); Uko Ramat Karap (Touching Each Other's Souls) (R. Tahara); Comments (J. Rodowicz, D. Onyszkiewicz, M. Ogasawara, J. Murata and M. Sugawara)	4
Why Polish-Ainu "Forefathers' Eve - Sinnurappa-Kunne Nisat" on Hokkaido in November? (J. Rodowicz)	8
New Members' Messages (H. Maruyama & S. Sakikawa)	9
Haiku Yearbook: Poland & Japan 39 (Monika Tsuda, Piotr Wrzeciono and Ch. Simoda)	9
"Opowieść o Bronisławie Piłsudskim. Polak nazwany Królem Ajnów" by K. Sawada Won the "Przegląd Wschodni" Prize! (J. Rodowicz & K. Sawada)	10
Stream of Consciousness of a Ukrainian Abroad (N. Petrishcheva)	11
Poland for me (M. Kawasome)	12
(New Books) "The History of Japan-Poland Relations II: 1945-2019" by E. Pałasz-Rutkowska, (K. Fujii) / "Pokój na Ziemi" by Stanisław Lem, translated by A. Shibata (K. Miyakaze) / "Mirror" and "Zoo" by Mikołaj Rej", translated by T. Sekiguchi (T. Tsuda) / "The Birth of the Third Republic: The Polish Regime Change in 1989" by M. Taguchi (M. Sengoku)	13
104 th Anniversary of B. Piłsudski's Death on 17/05/2022; Meeting with the Ensemble „Śląsk” at the Polish Festival on 18/06/2022 (A. Ando)	16
(New Books) "Conversation with a Young Ukrainian Soldier" by Y. Dobashi (N. Nagaya) (appendix)	17
Poem: Born in This Town (M. Koshino) (appendix)	18